

一毎朝辰牌後より未牌後までは、役所に罷在候略市中の人日傭取まで古雅に御座候皆々朝寐午時より未時頃迄は市人といへども一度づゝ晝寢也夜談をこのみ候米價は一升五十二文より九十文位まで故市人くらしよく候女の風俗重て可申上候餘程面白事に候かつぎを著候形など小原女の體など金屏風の如し二千年來の化には感じ入候

六月七日

大田覃

山内尙助様

一六月十八日出の狀廿五日夜相達候其地略江暑中冷氣の由此方略大は土用前は左のみにも不覺候處暑中酷烈夜分蒸しあつく御坐候乍去旅宿廣く風入候間凌ぎよく候其上夕方日影傾候へば二階の物干へ上り候處ことの外涼く御座候物干は屋根へかけ階子腰掛等有之南は紀州の山々近くは天王寺の塔東は伊駒山金剛山近くは大坂の御城の櫓白壁北は京の山山丹波の山西には武庫山甲山一の谷ひよどり越すま明石の方すこしはなれて淡路島其前は海木津川口の帆柱林のごとく近くは兩本願寺の堂下谷の稱念寺也大てい上野山王より見わたしたる所程又は愛宕より下の屋敷を見るごとく家根より下の方は大坂の市中不殘見わたし申候夕日に雲のうつるけしき機關の晝とも阿蘭陀晝とも可申是にて夕方は暑をわずれ臥り申候只今迄かゝる見晴しは覺不申ことに名所計にて中々詩も歌も出不申候略

七月二日

大田直次郎

島崎金次郎様

〔江家次第十二月〕御佛名

今夜差栢梨左近衛府攝津庄名也以彼地利所造之甘糟也

莊保